

水木しげる著「ほんまにオレはアホやるか」新潮文庫、新潮社 2002年8月1日刊を読む

ほんまにオレはアホやるか

1. もし、オーストラリアの支配下にあった時、このあたりの村長をしていた、トウラギリギという、オランウータンみたいなおじさんに肩をたたかれておどろいた。

「歌劇をみせてやる」

というのだ。

さっそく、オランウータン氏の劇場に行ってみると、ジャングルを平地にしてあるだけのもので、小さな小屋が一つ。その中に、歌劇でつかわれる素朴^{そぼく}な仮面がおいてあった。それぞれ、ビールビン一本と、ハシみたいなものをもつとオーケストラは開始した。各自ピンをたたくことで、妙なる調べがでてくるのだった。

歌劇というより、浪花節^{なにわぶし}にちかいのか、やたらオランウータンが独唱するのだ。やがて、花やかな、ポコポコと称するものを、各自両手にもって踊るわけだが、もうその頃になると、オランウータン氏は、歌劇によいしれて、目をつむり、うっとりしている。

2. なるほど、面白いものもあるものだと思っていると、椰子^{やし}の水がでる。椰子の水の中にコブラと称する白いものがある。それを、オランウータン氏が大きな口をあけて食べていると、サルの間になったのではないかとサッカクするほどだった。

なるほど、物はないのに、イロイロと面白いこともあるもんだなァと思った。なにしろ、われわれ日本人と考え方が、ぜんぜんちがうせいだろう。こんなにのびのびしていいのだろうか、と思われほどのびのびしているのだ。

そう思えば、戦争中、日本の兵隊が、たくさん働くといって、彼らは考えられないことだといって、笑っていた。日本人の方は彼らがナマケモノだといって笑っていたわけだが。

日本人の方は、競争して働いていると、なにかドエライものにありつけるような気持ちが出て、なんとなく馬車馬みたいに働いていたわけだが(その実はなんにもなかった)。

3. 彼らは、ゆっくり働く。自然の法^{のり}をこえないをモットーにしているらしい。だから、朝、畑に行き、穴をほってペケペケ(糞)をして、うめて、その日の食料をもってかえるだけだ。

月の夜は、みんな寝そべって話をしている。だから、家族間とは、部族間のコミュニケーションもうまくゆくらしく、あまりケンカはない。のびやかにくらしている。

子どもでも、こんなに笑っていいのなかなァ、と心配になるぐらい、のびやかに笑う。なるほど、この笑いこそ、人類が長年もとめた、幸福ってやつじゃないのかなァと、思われるくらいだ。鳥とか虫とかの声とまざって、自然に調和しているのだ。たしかに、われわれは、物質にはめぐまれて

いるかもしれないけれども、なにかを落としてしまったのだ。

4 . 物を生産しない原始的なものとか、よく変人、奇人たちがやっているへんてこだが、優雅ゆうがなくらしとか、あの猫たちが実践じっせんしている単純化したくらしとか、そういったものを、尊重したりせずに、何人かの群衆をたばねた者に、勲章くんしょうをやったり、政治家は、実業家と一体になって金もうけに狂奔きようほんし、「モノが第一だ」といわんばかりのことばかりやっているから、日本が面白くなくなってしまうのだ。

ポッポッポ

ハトポッポ

マメガホシイカ

ソラヤルゾ

ミンナデ

ナカヨク

トンデコイ

を合唱してわかれたが、考えられないほど、のびのびした生活になかばあきれ、オドロキ、南の島をあとにしたのだが。

5 . 彼らは、となりが倉をたてたのだから、ウチも建てようなんてソナ考えはない。競争心というやつが、脳の中でけさされているのだ。競争しなければバカになると、おびえることはない。大地の神が、けっこううまく調節してくれるものらしい。人におくれたからといって、オドオドすることはない。人間は元来、鳥、けもの、虫けらと、おなじものなのだ。

[コメント]

水木しげる氏が終戦をむかえた島を 30 年ぶりに訪れた際の印象記。人は何のために生きるのかを考えるとときに参考になる。

- 2010 年 3 月 27 日 林明夫記 -